

シリーズ

私の森語り
もりかた

森林・林業との関わりの中で、様々な課題に
挑戦されている方の取組を紹介します。



「お客様の隣で「これまで」と
「これから」を刻み続ける時計たち」



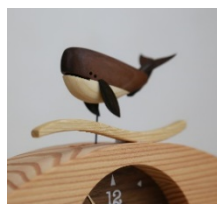
キコリ・デザイン研究所
代表
内田 英樹

■自己紹介

「キコリ・デザイン研究所」は、西の上高地と東側の秩父山地、それぞれを水源とする犀川と千曲川が合流するあたり、周囲を山に囲まれた長野市にある小さな木工房です。

■活動内容

信州には、カラ松があります。戦後に多く植林されたこの木は、ヤニが多く、比重に大きな差がある木目のため、加工し難い材とされてきました。その反面、美しい木理と、優れた強度を持ち、脱脂乾燥技術の進歩とともに、長野県を代表する木材の一つとして利用されてきました。キコリがこの木材の美しさに魅せられ、木の時計を作り始めたのは、今から四〇年くらい前のことです。



振り子のサカナが左右に揺れながら口をパクパク開閉したり、ネコが魚を見上げてしっぽを振ったり、ふくろうが時を知らせる鳩時計だったり、少し変わった掛け時計です。最近、特にご依頼が増えてきた修理品についてのお話です。

一〇年、二〇年と長く大切に使用して頂けたものを拝見するのは本当に嬉しく、新しい時計の開発にも参考になります。そのため、修理依頼はできるだけお受けしてきました。ほぼ毎日、いろいろな時計が届きます。落下により、枠がバラバラになったもの。二〇年以上押入れて眠っていたもの。斬新な芸術的センスにより色鉛筆で彩色されたもの。キヤラクターシールで埋め尽くされたもの。飼った猫にクジラの尾が噛みちぎられました、というダイナミックなものまで。

私は木工品を修理するにあたり、心掛けていることがあります。それは「完璧」に直さないということです。ある展示会でお客様からいただいた一言です。「先日、時計を修理に出したらネコの顔が新品で真っ白になっていて心底がっかりした。」当時、仕上がりは新品に近いほうが喜ばれるだろうと思い、一生懸命拭いたり、磨き直したり、再塗装したり、動きを良くするため、交換できる部品は新品にしてみました。

時計は何年も毎日休むことなく、人の隣で時を刻み続けます。木の枠の色褪せも傷も歴史として残り、年月が経つほど深みが増します。カラ松は丁寧に入入れられて使いこまれると、経年変化により表面は脂分で艶が出て、色は赤みを帯びた飴色になります。

お客様の今までを大切にし、これからは刻んでいけるよう修理する。埃、汚れだけ拭き取り、色褪せや傷はそのままだ。枠の割れは丁寧に接着し、なるべく色が変わらないように磨く。色鉛筆の落書きもシールもそのままに。クジラの尾は同じ種類のもので作り直した。

一九九五年、阪神淡路大震災が発生しました。一年ほど後に、「被災し

た時計をほぼ材料費のみで修理する」というサービスを行いました。

当時、神戸から送られてきた修理依頼品は、チャイムが鳴る、高さが六〇センチくらいの弊社の製品では一番大きな時計。文字盤前の扉の幅四センチ厚さ三センチのカラ松材の枠がネジ切られていました。人が乗ったくらいでは折れない木が真っ二つです。震災の大ききの片鱗を目の当たりにし、絶句したことを覚えています。損壊が大きすぎて修理が困難なため「新品に近いものを同じ金額にするので全部交換してはどうか」とご提案。少しご検討されたお客様の答えは「修理依頼」でした。「直しきれない傷が残ったとしても、それも思い出として残したい。」想像を絶する大変な経験をされたはずなのに、その先も思い出として残したいとするその決断。交換の提案をした自分を反省しました。

■メッセージ

時間と共に愛着が増し、人と一緒にずっと永く思い出を繋いでいけるように、ペットのような、家族のような、そんなものを作っていけたらと思います。

■連絡先

(有)キコリ・デザイン研究所

長野県長野市若里七丁目二二二

